

富士岡下河原観音講関係資料（平成 18 年度寄託）

.....

富士岡下河原の集落は富士市の東部、愛鷹山の麓とかつての浮島沼湿地帯の境界を通る根方街道と、愛鷹山を源流とする赤淵川の交わる場所に位置しています。根方街道の歴史は古く、平安時代以前の東海道はこのルートを経由していたと言われていました。

また、根方街道の沿線一帯は湧水地帯で、浸水してこない山麓の斜面や、山麓の小さな扇状地に集落がほぼ等間隔に点在しています。富士岡下河原の集落もその一つで、富士市の中でも、古くから人々が居住していた場所だと考えることができます。

その富士岡下河原の集落には、女性のみで構成され、観音信仰の行事を行う観音講（十七日講）という集団がありましたⁱ。しかし、富士岡下河原の観音講の活動は、講を構成している女性たちの高齢化などにより、平成 18 年 9 月をもって終えることとなりました。ここでは、活動の終了とともに、博物館へ寄託された観音講に関する様々な資料とその活動について紹介します。

講とは、ある目的を達成するために結ばれた集団で、その歴史は平安時代中頃に成立した、法華経を論説する八講会^{はっこうえ}までさかのぼることができると言われていました。また、講はその目的によって、宗教的講、経済的講ⁱⁱ、社会的講ⁱⁱⁱに分けることができますが、富士岡下河原の観音講は、観音信仰によって日常生活の安泰と豊穰、安産などを願って結ばれたものであり、宗教的な性格を持つ講であったといえます。

講の行事は月に一度、17 日の夜に行われます。この行事は講に加入している講員の家を交代で回り、開催されてきました。近年では 12、3 軒で開催場所を回っていたそうですが、もっとも多いときには、35、6 軒の家庭の女性が講に加入していたため、3 年に一度当番が回ってきたそうです。

17 日の夜、夕食を自分の家でとってから、講員はその月の当番の家へ集まります。当番の家では、前もって床の間に観音図と十三仏図の 2 本の掛け軸を下げ、その前に祭壇をセッティングしておきます。このうち、観音図は、臨済宗中興の祖といわれる白隠禅師（1685～1768）が描いたものと伝えられています。

白隠禅師は、明治初期まで富士郡比奈村（現在の富士市比奈。富士岡の西隣に位置する。）にあった無量寺を再建させるなど、富士の地にゆかりのある僧であり、観音を信じることの大切さを庶民に説きつづけたと言われていました。また、その布教活動は、観音講に属する人々の支援に支えられていました。これらのことから、当時の富士岡下河原の観音講と白隠禅師の間にも何らかの関係があり、その結果、白隠禅師が描いたとされる観音図が残されていたということも考えられます。

掛け軸の前の祭壇には、写真 1 のように、最上段左から水・観音像・茶、二段目に、高杯^{たかつき}に団子・飯とおかず・高杯^{りん}に果物、三段目に鈴・燭台・線香立・線香差・燭台^{しよくだい}・燭台（銘あ

り)・鈴、床に木魚・鉦^{かね}が並べられます。このうち、燭台の一つには「富士岡鈴木久蔵」との銘がありますが、この人物は最後まで観音講に加入していたある女性の夫の祖父になり、少なくとも100年以上前に製作され、寄進されたものと考えられます(写真2)。それ以外にも資料の中には、講員から寄進されたことがわかるものが残されています。



写真1 再現された祭壇



写真2 鈴木久蔵氏の銘のある燭台

また、鉦は観音講の資料の中では、もっとも古いものとされ、「西村和泉守作」との銘が刻まれています(写真3、4)。西村和泉守は江戸時代から大正時代にかけて東京神田で鑄物を製作していた職人が代々使用していた名前^{わにくち}で、この名が刻まれている寺院の鐘や鱧口^{わにくち}などが多く報告されています。



写真3 観音講で用いられる鉦



写真4 鉦に刻まれた銘

観音講の鉦についても、江戸時代から大正時代にかけてのある時に、神田から購入したという可能性が考えられます。そして、この鉦は、観音講だけに用いられるのではなく、集落内で葬式が行われる時の合図にも使用されたそうです。

さて、観音講の講員が当番の家に到着すると、それぞれ祭壇に賽銭^{さいせん}と線香をあげます。この賽銭の額は個人の判断に任されていますが、集まった賽銭は積み立てられ、講員の家族や本人に訃報があった時の香典や、講の行事に使う道具の新調や補修、食事会などに使用されてきました。

講員がすべてそろうと、そのうちの2人が木魚と鉦を使って音頭をとり、全員で南無阿弥陀仏を7回唱えます。その後、十句観音経を17回、般若心経を1回、御詠歌の1番から10番と33番、南無阿弥陀仏を7回、十三仏念仏を13回唱えます。最後に、普回向^{ふえこう}とよばれる願いの言葉を唱え、行事は終了します。

その後、お茶やお菓子が出され、しばらく世間話や相談事をして、解散となります。当番の家では、翌日の朝に祭壇や掛け軸を箱にしまい、あまり触られないような場所に置いておきます。そして、次の月初めの大安の日に、次の当番へ行事の道具一式を渡すこととなります。

近年では、上記のような月の行事が中心に行われていましたが、昭和 40 年頃までは、賽銭とは別に積み立てを行い、講員で温泉旅行などを行っていたそうです。先にも述べたように、観音講は日常生活の安泰と豊穰、安産などを願って結ばれたものです。しかし、現在のよう
に、テレビや気軽に旅行に行くといった娯楽が充実していなかった当時では、月に一度集まり、年に一度旅行に行くこの集まりが、女性たちにとって、かけがえのない楽しみだったのではないのでしょうか。

(文責 井上卓哉・当館学芸員)

富士市では、富士岡下河原以外にも観音講を行っていたグループが報告されている。また、集落内の日蓮宗の宗派の家庭では観音講には入らず、その宗派だけで十二日講という講を構成し、同様の活動を行っていた。

経済的講には、仲間内で困窮した人がいれば、講で積み立てた掛け金を融資するという相互扶助のための組織として近世以降定着した頼母子講や無尽講などがある。

社会的講には、労働力交換のための講や葬式のための講、世代別に組織される子供組、若者組、老年講、同じ職人同士で構成される講などがある。
